

大腿骨転子部骨折の病期変化に伴う臨床推論ネットワークの変化 —初学者と熟達者の比較—

○高橋 可奈恵^{1,2} 堀 寛史³ 松下光範¹

1. 関西大学大学院総合情報学研究科 2. 東大阪病院 3. 甲南女子大学看護リハビリテーション学部

背景 理学療法推論はその体系化が進んでおらず客観的な評価が難しい。

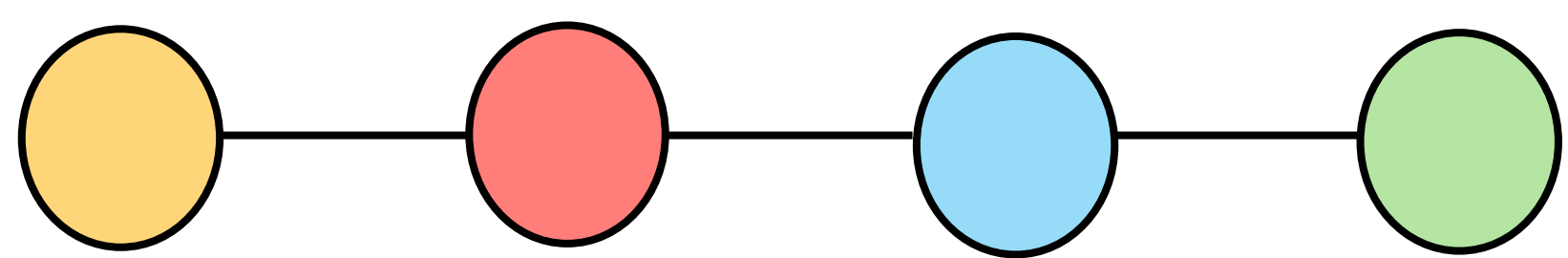
目的 ①臨床推論を構造化し、初学者群と熟達者群の推論過程を客観的に比較する。
②急性期と回復期の2地点で、各群の推論パターン・着目点の違いを明らかにする。

方法

対象者：初学者群 経験年数1～3年の10名，熟達者群 経験年数5～13年の10名

実験方法：大腿骨転子部骨折術後7日目および30日目の模擬患者データを提示し、**心身機能の問題点**、**問題点が起きている身体部位**、**問題点を導くために必要な検査**を選択させた。

提案手法：「患者→**問題点**→**身体部位**→**検査**」の有向グラフを構築し、ノード数とエッジ数を算出した。ノード数は問題点・身体部位・検査の総数、エッジ数はそれらを結ぶ関係の本数を示す。



例 ノード数：4つ
エッジ数：3つ

患者 → ①心身機能の問題点 → ②対象部位 → ③データ

分析方法：①術後7日目から術後30日目にかけてノード数・エッジ数が減少するのかが検証するため、各群内で対応のあるWilcoxon符号付順位検定を実施

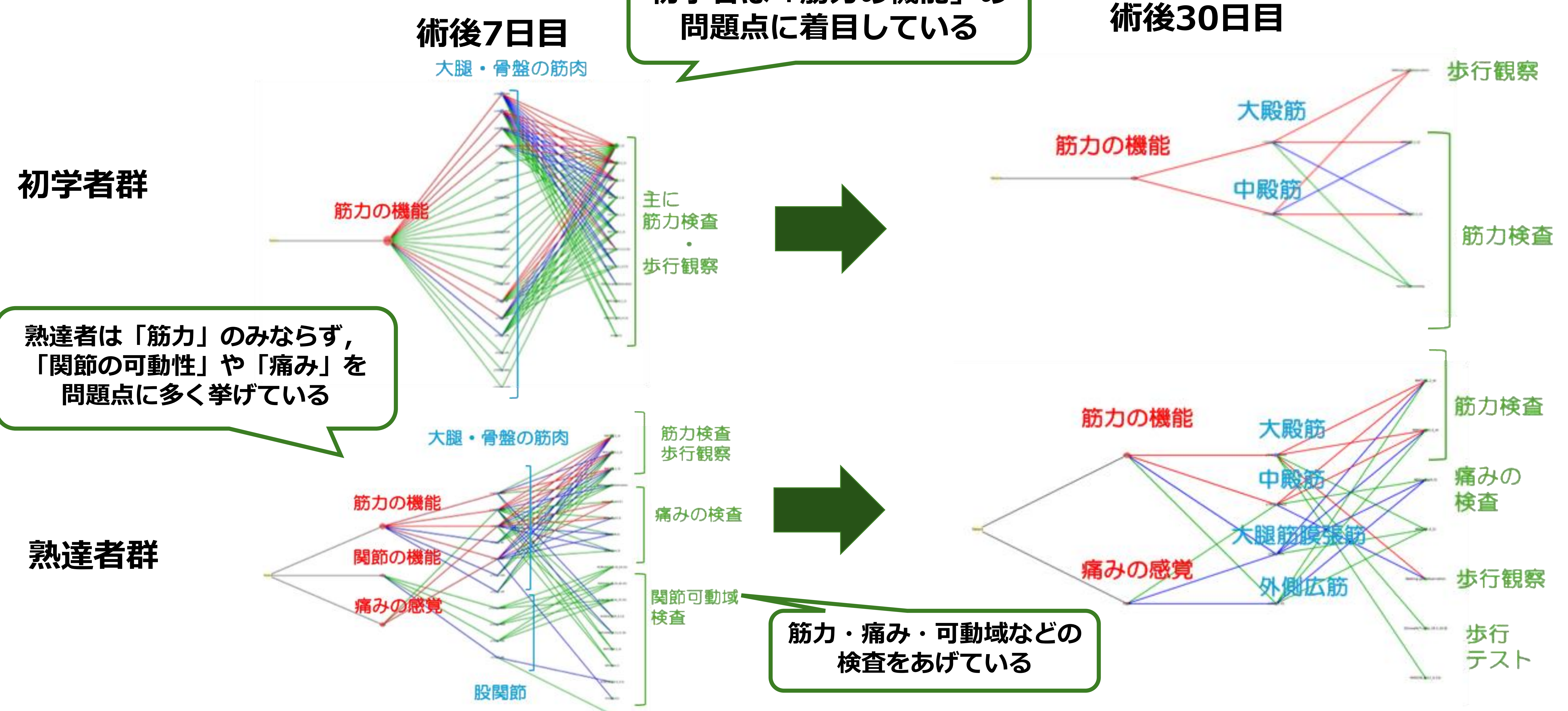
②各群の回答を統合した集約ネットワークを作成し、群間で比較した。

結果

①対応のあるWilcoxon符号付順位検定の結果

	初学者群	熟達者群
ノード数	術後30日で 有意に減少した 中央値 23.0 → 14.0, $p=.042$, $r=-0.833$	有意差は認めなかった 中央値 33.0 → 15.0, $p=.053$, $r=-0.709$
エッジ数	有意差は認めなかった 中央値 59.5 → 19.0, $p=.109$, $r=-0.622$	有意差は認めなかった 中央値 79.5 → 28.5, $p=.083$, $r=-0.636$

②集約ネットワークの結果



集約ネットワークの表示： — 5人以上 — 4人 — 3人 2人以下非表示

考察

初学者群は急性期でも着目範囲が限定的であり、回復期に伴って選択がさらに収束した結果、ノード数のみ有意に減少したと考える。大腿骨転子部骨折の模擬症例では、初学者群は病期の変化に関わらず「筋力の機能」に着目しやすく、熟達者に比べて推論パターン・着目点が偏りやすいことが明らかになった。